

## 英語学習センターの設置とそのあり方

川崎医科大学 英語学教室

古橋典子

(昭和55年9月13日受理)

Establishment of an English Learning Assistance Center  
in Japanese College:  
Its Needs, Purpose, Function, and Operation

**Noriko KOBASHI**

*Department of English, Kawasaki Medical School*

*Kurashiki 701-01, Japan*

*(Received on Sept. 13, 1980)*

### 概 要

今日実社会で要求される英語能力は大変高度となっており、大学における一般教養としての英語学習だけでは不十分となってきた。また、大学教職員にとっても、自分達が専門分野で国際的に活躍するためには、英語は不可欠な時代である。そういう時代に必要となってきたのが、学生・教職員を問わず英語を学習する場である。すなわち、大学内に英語学習センターを設置し英語学習の中心の場とすることである。この英語学習センターは、学生・教職員が自由にそして自主的に英語学習を続けていけるよう適切な教材・指導と学習の場を与えるところである。ここでの教材・指導は、すべて individualized そして personalized を基としたもので、学習者個々の必要に応じたものでなくてはならない。本稿では、この英語学習センター設置の必要性を説き、その目的・機能、さらに川崎医科大学を実例に運営方法などを総括的に述べていく。

### Abstract

English being highly required in such professions like medicine and business, English learning in college as a part of general education is not sufficient for the students to meet their future needs of English. Likewise, those who are already in their professions also have to keep up or polish more their skills in English in order for them to stay active in the international academic world. Therefore, I suggest establishing an English Learning Assistance Center at college as a place where learners (students and faculty staff) can continue learning English freely at their own pace and level with personalized and individualized instructional materials and tutorial assistance. In this paper, I discuss my idea and plan for establishing an English Learning Assistance Center and its operating methods on a general ground.

## §1. English Learning Assistance Center (英語学習センター) 設置の必要性

### 1. 米国における Learning Assistance Center の歴史

米国において大学教育の一般化にともなって、大学生のレベルが低下し、学習のし方すら定かでない者が増えてきた。このことは、毎年新人生に対して行なわれる aptitude test (大学適性試験) の成績が悪くなっていることをなげいている教育者達がいることをみても明らかである<sup>1)</sup>。この傾向の理由は明らかにされてはいないが、これに対処するために、最近(ここ10年間ほどに) 新しいセンターが全国的に設置されてきた。それが Learning Assistance Center (LAC) という名で代表される学生の学習を援助するための場である。この Learning Assistance Center は、もともと読むことを中心に、学生の学習上のつまづきを助けてやるためのもので、低学年生の利用が主であった。しかし、後になって高学年生に対しても、専門分野における補足指導を行ない始めた。また、大学を卒業した者でさえも、次の学位取得の予備学習の場として利用できるようになってきた。(Standardized Tests as the Medical and Law School Administration Tests, Federal Service Entrance Exams, Graduate Business Admissions Test などを受験するための勉強がそれである。)

米国の大学で初めて学生のための Learning Assistance らしきものが考え始められたのは1940年代後半で、Remedial Reading と Writing Clinics を中心としたものであった。1950年代に入り、Ohio, New York, Michigan 大学を中心に、学生のレベルと能力差に目を向け、それに対処すべき学課が必要とみなされてきた。実際に、“How to Study” という課目がカリキュラムに組みこまれ、大学生としての正規の講義を受ける前に学力の低い学生に課した。これは、Psychology Department, Educational Psychology Department あるいは English Department が主体となって計画された。また、Student Services のもとに学生のための学習プログラムが開発されたり、カウンセリングサービスもなされだした。しかし、まだまだセンターとしての形をみたわけではなく、独立したセンターとなるのは1970年代を待たねばならなかった。1960年代に入って、Learning Assistance Center というものの必要性和その理論が具体的に論じられ、1966年カリフォルニアの短期大学で、“Laboratory” とか “Center” という名のもとに図書館の一部門として、Learning Assistance Center が芽をふき始めたのである。そして、1970年までに、米国内に少なくとも15のセンターが設置された<sup>2)</sup>。その中で、St. Louis Junior College District が計画した The Instructional Resources Services は Instructional Materials Center と language lab とに分けて学生の指導にあたり、学生を大学生として学業が行なえるにふさわしいレベルにまで向上させることに成功した。他に、North Carolina 大学における Fundamentals Learning Laboratories は Adult Education の一貫として設けられたものであったが、後に学生が学業レベルを向上させ大学を無事終えられるよう academic assistance を与える場となった。他のセンターの中でユニークなのは、1970年までにいち早く図書館から独立したセンターをつくりあげた

Lane Community College の The Study Skills Center で、学生に対する 読み書き・学習のし方の指導だけでなく、大学での講義を補充・補強するためのプログラム学習教材が準備されたのである。1970年に入って Learning Assistance Center は軌道に乗り、学問的にも研究されるようになった。El Camino College の Gene Kerstins とか California State University, Long Beach の Frank L. Christ のような専門家が現われてきて、Learning Assistance Center はいよいよ本格的に組織化され、大学内で重要な役割を果たす機関となってきたのである。

## 2. Learning Assistance Center とは

さて、この Learning Assistance Center とは、California State University, Long Beach の LAC Director である Frank L. Christ が述べているように、

… a place concerned with learning environment within and without, functioning primarily to enable students to learn more in less time with greater ease and confidence; offering tutorial help, study aids in the content areas and referrals to other helping agencies; serving as a testing ground for innovative machines, materials, and programs.<sup>3)</sup>

ということである。すなわち、Learning Assistance Center とは学生のための学習の場であって、学習の方向づけ・学習の仕方などの指導を行なう。また、個人指導とそれぞれの分野に合った学習教材補助を提供することによって、学生が学業に自信をつけ、多くの事を少しでもたやすく短時間に学ぶことができるようにしてやる場所である。ここでの指導は講義とは異なって、個人差を重視した individual & personalized program 方式がとられている。

## 3. 日本の大学における English Learning Assistance Center (英語学習センター) 設置の必要性

さて、提案したいのは、この米国の Learning Assistance Center とまではいなくても、その部分的な機能を果たす English Learning Assistance Center (以後 ELAC と略す) の設置である。今や英語はどの分野においても欠かすことのできない重要なものである。しかしながら、英語を専門とする大学以外での英語教育は、ただ単なる一般教養としてのもののみにとどまっている。また、その一般教養の英語も、実力向上というよりもただ単位取得の目的となっていて、高校3年をピークに英語の実力は低下線をたどる一方である。大学での英語教育がみよりのあったものとしても、大学最初の2年間だけでは、学生が実社会に出てりゃばに英語をつかひこなせるようになるためには不十分である。それに、せっかく中学3年・高校3年・大学2年間で習得した英語力も、残す大学での2年あるいは4年間のうちに忘れてしまっている現状である。したがって、どうしても一般教養を終えた後にも英語学習を続けられる場、また、学生が自分の習得したい英語技能を授業のあい間に自主的に学習できるような場所と機能が重要なのではないだろうか。

日本の大学語学教育はなっていないと外国人語学教授者からよく指摘される。その原因のひ

とつにマスプロ教育があげられる。1クラス60人以上もいるクラスで、学生の英語力を正確に把握して適切な指導をすることは困難である。ましてや、そのようなクラスをたくさんもっている教授者にとって、ひとりひとりの学生に目を向けることは不可能である。したがって、多人数クラスでよく採られるのが講読方式講義である。しかし講読方式だと、単位さえ取ればと考えている学生は、英文には目を通さず和訳文のみに力を入れる。単位は取ったが英語はさっぱりわからないという学生がでてくるのである。そういった学生も、英語を必要とする大学（たとえば医科大学）での高学年にもなると、英語の必要性をひしひしと感じさせられる。そういった時に、学生がいつでも英語学習のために帰ってこられる場所が必要なのではないだろうか。

学生ばかりではなく、教職員の中にもそれぞれの理由で英語を習得したいと望んでいる人達がいるはずである。各々の専門分野で国際的に活躍している者はより一層英語力向上のために学習できる場を、職場で英語が必要な事務職員は英語習得のための教材と指導を得られるところを、また、教養としての英会話を身につけたい者は会話の指導を受け練習のできる場を必要としているのではないだろうか。

そういった学生・教職員の英語学習を個別的に援助するために大学内に設置するのが、English Learning Assistance Center（英語学習センター）なのである。

## §2. ELAC の機能

ELAC は大学全体の英語学習の中心の場として、学生・教職員に適切な教材・指導・学習の場を提供し、そのひとりひとりが英語のハンディを乗り越えて、自分の専門分野でより一層の成功をおさめることができるよう指導・援助するところである。ELAC の主な機能はそのように、英語学習者への学習指導であるが、そうすることによって、大学全体の英語学習の志気を高め、英語レベルの向上に努めることにある。その指導も具体的には、英語学習のし方の指導、英語力診断により学習の方向づけと弱点の補強指導、専門分野への橋渡しとなるよう英語力習得の援助と指導、新しく身につけたい英語技能（たとえば英会話・タイプなど）の指導などである。すべて学習者を中心とした教材・資料と個別指導のもとに、学習者が自主的に自分のペースで自由に英語学習に励んでいけるところである。

## §3. ELAC の運営方法とそこでの指導法

運営に関しては設置大学ごとの工夫によればよいが、本稿では、参考までに川崎医科大学 ELAC の運営方法について記しておく。

### 1. ELAC の PR

ELAC の運営にあたってまずしなければならないことは、このような英語学習の教材・指導を得られる場があるということを大学内に知らせることである。その方法は、ポスター・展示などによるが、機会あるごとに教員会・クラス内で知らせることが必要である。ELAC が

軌道に乗ってくると人伝えにおのずから知られてくるようになるが、常に、ポスター・展示はもちろんのこと、Newsletter・Bulletin や大学新聞 などを利用して ELAC が大学内に浸透していくよう努めなければならない。

## 2. 学習者の登録

まず、学習希望者に直接会って最初のカウンセリングにより、学習希望分野を知りそれに応じた語学力診断と調査を行なう。それによってその学習者に合ったプログラムが決まり、正式に ELAC に登録する。登録は、初回のカウンセリングで決まったプログラム名と学習者の氏名・住所の他に今後学習者への指導に役立つだろう内容を、登録書に記入して行なわれる。登録者には、登録番号・氏名・プログラム名が記入された登録者カードと学習ファイルが与えられ、個々の英語学習に入って行くのである。

## 3. 学習ファイル

学習ファイルは個人の学習記録をつけていくもので、ファイルはA4判のものを使用し、学習者用キャビネットにアルファベット順にファイルしておく。この学習ファイルには、氏名・登録番号・プログラム名が記入され、なかには、そのプログラムに必要な諸用紙（answer sheets, progress charts, counseling sheets, etc.）と、texts や tapes などが入っている。学習者は自由に ELAC へ来て自分の学習ファイル内の指示に従って学習をしていく。この学習ファイルが学習者と指導者を結びつける重要な役目を果たす。すなわち、指導者は学習ファイルを通じて学習者の学習量・進捗度・問題点などを常にモニターしていき、学習の指示・指導を与えていく。

## 4. 個人学習とカウンセリング

プログラムが決まり学習ファイルができると、それに従って学習者は個人学習に入る。学習分量は、学習者のペースとレベルに合わせて、一度に15～20分でできる内容のもので、それができるとセンターに提出しておく。指導者はそれをすぐに採点・添削し、次の学習指示と共に学習ファイルに納めておく。すると、学習者は後に来て、自分のやったところをみなおし、理解できないところがあればその旨を学習ファイルに記入して再指導を受ける。学習者に質問や理解できないところがでてくると、指導者はできるだけ詳しく説明を加えておく。もし文面だけで説明が充分にできない場合は、センターのアシスタントを通して、カウンセリングのための appointment を取るよう学習者に伝える。そして、学習者に直接会って説明・指導を行なうとともに、学習上の問題点やつまづきがあれば、一緒に話し合う。このように、学習者ひとりひとりに対してその時その時に応じた適切な指導を与えていくのである。主に学習ファイルを通しての指導であるが、progress charts や answer sheets などに目を通すことによって、学習者を常にモニターしていく。そして、学習者につまづきや問題点がでてくると、すばやくストップをかけ1対1のカウンセリングを行なう。場合によっては、学習方向・教材を変えることもする。また、伸びている学習者に対しては、アドバンスしたレベルのプログラムへ進ませることもする。

#### §4. 人事と任務

大学の規模にもよるが、ELAC を運営するために必要な人数は単科大学であるならば、指導者1～2名、センターの事務いっさいを扱うアシスタント2名が最小限必要である。理想をいえば、指導者はそれぞれ読む・書く・話す・聞くの4技能を専門とする人が1人ずついることが望ましい。任務は、指導者とアシスタントで次のように分かれる。

指導者 — 学習者の語学力診断、プログラム設定、採点・評価・添削、学習指導、  
教材・資料の検討と収集、教材開発、学習者のモニター、など

アシスタント—登録者の受付、学習者の世話、教材作成と整理、プリント・テープなどの作成と配布、教材・資料・書籍の分類と整理、教材の貸出し、指導者と学習者との緊密な連絡、など

#### §5. 教材

ELAC での英語学習は英語全般にわたるもので、reading (remedial reading, corrective reading, developmental reading, power or speed reading), vocabulary building, conversation, listening comprehension, composition, speech, type, などと幅広く、すべて学習者ひとりひとりに合ったものでなくてはならない。また、学習は自分のレベルとペースで学習者が自主的に自己の英語力を向上させていくものである。教材もそれに合ったものでなくてはならない。教材としては、個別学習指導ができるようプログラム方式になっているものがよく、カード・テープ・フィルム・スライド・VTRなどが考えられる。一度の学習も内容を最小限にしぼって、難度がだんだんとついているものがよい。教材を選び学習者に与える場合に大切なことは、この ELAC は individualized そして personalized ということで、学習者は皆異なるのだから、能力・必要に応じた教材を準備しなければならない。ELAC の運営も、いかなる教材があるかによってその難易が変わってくる。日本にはまだないが、米国には多く individualized & personalized な tutorial materials が市販されているので、それらを日本の ELAC で使用できるよう工夫し大いに利用していくとよい。指導者も慣れてくると、自分の大学と学習者に合った教材を開発していくこともできくる。

#### §6. 川崎医科大学 ELAC の現状

川崎医科大学の ELAC は、筆者の2年間の下準備のもとに、1979年10月1日LL教室の一部としてオープンした。それから約1年、多くの人々の支援のもとに成長してきた。

##### 1. 登録状況

42ページの表1に示すように、登録者数も毎月少しずつではあるが増えてきている。そして、1980年8月現在で148人となっている。登録者が一番多かったのは4月で、新年度の始まりというせいもあって、新入生・新入職員の登録が多かった。10・11月と1月が他の月に比べて多

表1 登録状況

年 月	人 数	合 計
1979 8	4	4
9	13	17
10	16	33
11	24	57
12	8	65
1980 1	15	80
2	7	87
3	6	93
4	45	138
5	3	141
6	2	143
7	3	146
8	2	148

録者はまだいない。また、「書く」に登録している4人のうち2人はタイプを学んでおり、他2人が composition をしており、プログラム名は、Guided Composition Program (GCP) である。

### 3. 学習者の層

表3でわかることは、学生の中で一般教養を終えた後も英語学習を希望する者が、他の層に比べて多くいることである。大学3～6年生と大学院生・レジデントを合わせた登録者数は、51人と学習者層の中で一番多い。次に、大学1・2年生であるが、講義とは別に自分の弱い点に力をつけている者、また、他の技能を習得しようと頑張っている者が38人いる。大学教職員が23人いるが、主に国際学会などに備えての会話・ヒヤリングの学習をしている教官や研究補助員達である。病院職員29人の中には、看護婦・事務職員・栄養士・薬剤師などがいて、教養として身につけておきたいと「会話」の勉強に励んでいる者、自分の職場で生かしたいと「読み」の勉強に励んでいる者がいる。

### 4. 利用者状況

この利用者状況(表4)は、1979年10月の第1週から数えて1980年7月5日の第40週まで、

表2 学習分野別登録者数  
(1980年8月現在)

学 習 分 野	登録者数
Reading	99
Writing	4
Conversation (Hearing)	50 (10)
Medical English	0
その他	1

表3 登録者の層  
(1980年8月現在)

学 習 者 層	人 数
大学 1・2年	38
大学 3～6年	41
大学院生・レジデント	10
大学教職員	23
病院職員	29
リハビリ学院生	6
その他	1

計 148

かったのは、定期的に掲示する ELAC のポスターの効果があったためである。7月・8月のように長期休暇中となると、やはり登録者も少ない。

### 2. 学習分野別登録者数

まず、学習分野として、「読む」「書く」「会話(ヒヤリングを含む)」と「医学英語」とした。表2でわかるように、登録者が圧倒的に多いのは、早くからプログラムが準備されていたということにもよるが、「読む」の分野で、1980年8月現在99人である。次に多いのが「会話」で60人を占めている。この「会話」を学習している者の中には、同時に「読む」の学習をしているのが11人いる。「医学英語」は、プログラム準備中のため登録者はまだいない。

表4 利用者状況

(1979年10月1日～1980年7月5日)

週	利用者数		週ごとの 合計 利用者数	累積 利用者 数	週	利用者数		週ごとの 合計 利用者数	累積 利用者 数
	センター での学習 者数	教材持ち 帰り利用 者数				センター での学習 者数	教材持ち 帰り利用 者数		
第1	56	49	105	105	第21	46	191	237	4,143
2	69	87	156	261	22	26	0	26	4,169
3	85	95	180	441	23	30	3	33	4,202
4	61	56	117	558	24	32	4	36	4,238
5	64	99	163	721	25	22	11	33	4,271
6	72	155	227	948	26	23	2	25	4,296
7	104	194	298	1,246	27	0	1	1	4,297
8	79	104	183	1,429	28	52	53	105	4,402
9	83	81	164	1,593	29	53	63	116	4,518
10	89	129	218	1,811	30	64	99	163	4,681
11	52	0	52	1,863	31	23	148	171	4,852
12	53	0	53	1,916	32	39	97	136	4,988
13	53	2	55	1,971	33	31	228	259	5,247
14	4	0	4	1,975	34	35	278	313	5,560
15	101	254	355	2,330	35	27	349	376	5,936
16	98	261	359	2,689	36	38	245	283	6,219
17	73	184	257	2,946	37	81	358	439	6,658
18	83	287	370	3,316	38	137	384	521	7,179
19	82	245	327	3,643	39	318	232	550	7,729
20	46	217	263	3,906	40	24	0	24	7,753

週ごとに集計したものである。利用者が最も多かったのは第39週目で550人、1日の平均になおすと91人になる。これは、学期末試験に備えて英語の勉強のためにELACを利用したELAC登録者以外の1・2年生が多くいたことによる。第38週についても同じ理由である。また、ELACがオープンした1979年の10月1日から40週たった7月5日までに利用した者の延べ合計人数は7,753人で、これを1週間平均になおすと193人、1日平均だと32人ということになる。すなわち、ELACで学習したり教材を借りたりして英語の勉強している者が、毎日32人いるということである。

##### 5. ELAC 部屋の配置

現在ELACの部屋として利用しているのは、LL教室とその準備室である。図1の7がLL教室で、44のブースが設けられている。この部屋を個人学習の場として学習者に開放している。図1を順番に説明すると、1は学習者の出入口で、そこには学習ファイルキャビネットや配布用プリント・提出箱などを置いている。2は教科書とかカード方式になった教材を収納しており、学習者が自由に利用できるようになっている。また、小グループ学習とか教材の貸出しもここで行なわれる。3はアシスタント2名の机があり、事務いっさいを行なうところである。4は学習者とのカウンセリングに使う指導者用の場で、テープの教材を作成したり、またその作成したテープの整理収納も行なうところである。5は会話を指導するところで、防音装



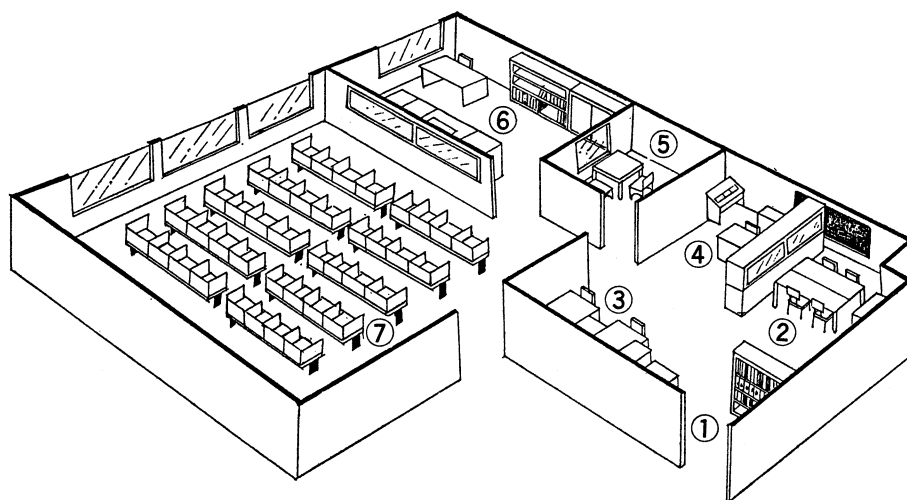


図1 川崎医科大学 ELAC 部屋の配置

置がついているのでカウンセリングに使用することもある。6はLLのコントロール室であるが、配布用プリントを作ったり整理したりするためにも使用している。

## §7. 結 び

以上、大学レベルでの ELAC 設置の必要性とその目的・機能と運営方法などを総括的に述べてきた。この ELAC 案は始まったばかりで、今後いろいろな研究・試み・工夫をかさねていかなければならない。ELAC が米国の Learning Assistance Center のように組織化され、広く日本全国の大学で設置されるようになるには長い長い年月を要するであろうが、ひとりでも多くの英語教育者が ELAC の必要性を感じ実行に移してくれることを祈って本稿の結びとする。

## 謝 辞

最後に、ELAC の設置運営に際し、共に苦勞してくださっている土井寿恵・木下幸子両女史と、ここまで御支援下さいました財団法人操風会、川崎医科大学松本副学長並びに諸先生方に深く感謝するとともに、今後いっそうの御助力を賜わりますようお願い申し上げます。

## 文 献

- 1) Antich, Mike. "Others Turn to CSULB for Learning Center Blueprint," University Bulletin: CSULB, 28. (April 6, 1976), p. 3.
- 2) Christ, L. Frank. "Systems for Learning Assistance: Learners, Learning Facilitators, and Learning Centers," Interdisciplinary Aspects of Reading Instruction. WCRA Proceedings, 4. ed. by Frank L. Christ. (April 1971), pp. 32-41.
- 3) Enright, Gwyn. "College Learning Skills: Frontierland-Origins of the Learning Assistance Center," College Learning Skills Today and Tomorrowland, 8. ed. Roy Sugimoto. (1975), pp. 81-92.